

# 令和元年度の博物館実習 ( 館園実習 ・ 学内実習・見学実習 ) について

九州保健福祉大学学芸員養成課程

年号が平成から令和に代わって最初の博物館実習であった。

4 年次生を対象とする博物館学内実習・館園実習では 2 名の参加があり、例年通り企画展示を実施した他、それぞれ福岡県にある立花家史料館・大牟田市動物園において館園実習に参加した。3 年次生については見学実習を実施している。それぞれの実習においてお世話になった館園には、御礼申し上げたい。

学内実習では公園にある様々な遊具からみた風景をテーマとした写真展示を実施した ( 写真 1 )。近年、老朽化や安全管理の問題から、公園遊具が以前と比べて大きく変化している。かつてどこの公園にもあったジャングルジムのようなフレーム状に構成された構築物に変わって、現在では板状に覆われたものが多くなりつつある。子供達が格子の立体の中に四肢を絡めて遊びながら、時折真上を見上げれば青空が広がっていた空間が空きのスケルトンが、今では公園やその周辺環境の日常風景も、包み込まれた小窓の間から体をねじってこっそりと覗きこまなくてはならなくなってしまったのである。



写真 1: 企画展『変わったもの、変わらないもの—遊具からみた風景—』( 左: ポスター、右: 展示会場 )

変わってしまった公園遊具から望み観た都市の風景は、かつての自分が見知っていた風景とどう違っているのか。「まち」の変化とこれからの社会を意識させていこうとする狙いが、この写真展にはある。写真というツールを使ってこれまでの企画展以上に表現の領域に食い込んだ展示が構築されていった。

今年度は気象災害が頻発した事もあって、学生の館園実習参加にも大きく影響した。そのため実習先では当初予定していたプログラムが実施出来ないのみならず、実習生の安否確認を行わなければならない状況も生じた。熊本地震の際に学生の实習可能施

設が限られてしまう等の混乱を一度経験しているものの、この文章を書いている令和2年3月現在にもコロナウィルス感染の拡大があり、今後もこれまでには予期していなかった事態への対応が求められるのかもしれないと考えている。

また3年次生を対象とした見学実習については、例年通り宮崎県総合博物館・宮崎県立西都原考古博物館にて10月19日に実施した。今年度は5名の参加であった。

## 立花家史料館 (福岡県 柳川市)

実習期間：令和元年8月19日～8月30日

薬学部動物生命薬科学科

加藤 恵理香

立花家史料館は、公益財団法人立花財団が運営している博物館で、国指定名勝柳川藩主立花邸「御花」の敷地内にある。立花家に伝来した多くの美術工芸品を収蔵しており、歴代藩主の甲冑等の常設展と、季節ごとに変わるテーマ展示を行い大名文化を現在に伝えている。私は10日間の実習に参加した。実習生は私を含めて3人で、10日間共に活動した。

まず1日目はオリエンテーションで自己紹介を行い、「展示物の中で家に持って帰って飾るならどれにするのか。理由も考えながら鑑賞する。」という課題のもと、館内見学を行った。これは「ただ鑑賞するよりも、何か意図を持って鑑賞した方がよく観察し考えながら展示品を見ることができし、楽しめる。」ということだった。私は「牡丹唐草蒔絵雛調度」を選んだ(写真2)。理由は、細々とした小物の作り方などが気になり、また小さいため部屋に飾りやすいと考えた。午後からは御花についての説明を聞きながら庭園内を案内していただいた。

2日目・3日目は、久留米市にある有馬記念館の展示替えを担当の方の繋がりでお手伝いさせて貰った。有馬家に伝来した茶器の展示ということで、茶器の扱いに慣れ



写真2: 牡丹唐草蒔絵雛調度

ている私たちの担当の方に依頼があったそうだ。有馬記念館の方にも実習生が3人ほど来ていて、共同で作業を行った。資料の大きな配置は決まっていたので、展示台の準備から資料の細かいレイアウトまでを有馬記念館の新しい学芸員の方と指導を受けながら行った。

また、私たちは直接資料に触れられないので扱い方を学んだ。空き箱などを使い、紐の結び方を練習したり、練習用の掛け軸を掛けたり巻いたりなど、資料になれる練習を行った。この2日間で難しかったのは、茶道具のレイアウトだった。事前に道具の名前や使い方などを教えていただいていたが、使い方の分からない道具があったりどうすれば来館者に道具の役割をわかりやすく伝えられ、尚且つ資料の見せ方にも考慮しなくてはならないので難しかった。

最終的には実際に道具を使用する時の配置方法でレイアウトした所、全員が納得するものとなった。

4日目は、立花家史料館の植野かおり館長の講演会を拝聴した。御花の裏手にある「かんぼの宿」での北九州地区の大学職員の集まりで行われた講演会であったが、柳川藩立花家の歴史について聴講させていただいた。講演会の後、史料館の映像図録の物販を行った。この日は最後に「庭園内にある<船着き場>・<テニスコート>・<三柱神社>をHPやパンフレットで紹介する時に、どんな写真を用いて紹介するかを考えながら撮影し、後日発表するように。」という課題が出された。

5日目は太宰府市にある「太宰府天満宮」と「九州国立博物館」の特別展を見学した。太宰府天満宮では『神社に奉納された名刀展』が開催されており、熊本地震からの阿蘇神社復興支援として阿蘇神社の「蛭丸写し(真打・影打)」が展示され収益の一部が義援金とされた。他にも日本刀や甲冑、書や詩などが展示されていた。

九州国立博物館では『室町将軍 戦乱と美の足利十五代展』が開催されていた。歴代足利将軍の所縁の品や刀剣・肖像画などが初代から順を追って展示されていた。最後の展示エリアでは将軍13体の坐像が勢揃いし、圧巻の締めくりだった。このときの見学でも「自分の部屋に飾るならどれか」と課題が出された。

6日目・7日目は資料整理を行った。資料の貸し出しや交流のある館の図録・目録・資料集といった書籍に掲載されている情報について、パソコンに館名・題名・目次などを入力し目録化していった。

8日目は、悪天候で警報が出たため実習が休みとなった。

9日目は、午前中に資料整理の続きを行い、午後から資料貸借時の作業の見学をさ



せてもらった(写真3)。資料を借りに来たのは福岡市博物館の方で、同館の『もののふの美 侍展』(9/3~11/4)で展示する具足や兜の計4点の貸し出しだった。同博の方が資料の傷の有無や現状を様々な角度からライトを当て確認、比較的新しい

写真3: 資料貸借時の作業を見学する



傷があった場合は写真やメモ書きで記録し運送会社の美術運搬専門の方が梱包していくという流れだった。

今回の実習では、普段見ている博物館の表の様子が一般にわからない裏側の作業によってどのように支えられているのかを詳しく知ることができた。

地道な作業や細かな鑑賞者への配慮など、改めて普段の鑑賞の裏に学芸員の工夫を垣間見ることができた。なかなか見学できない貴重な体験をさせていただきとても勉強になった。

大牟田市動物園 (福岡県大牟田市)

実習期間：令和元年9月3日～13日

薬学部動物生命薬科学科

北川 祐紀

私は福岡県大牟田市にある大牟田市動物園での実習に参加した。この動物園ではライオンからの無麻酔採血を日本で初めて成功させたことをネットで知り、どのようなトレーニングを行うことで成功させたのかを実際に見てみたいという思いがあり、実習をお願いした。内容は飼育実習中心で、5つの班での活動全てを体験した(表)。

この園は「動物福祉を伝える動物園」をコンセプトに『ハズバンドリートレーニング』や『環境エンリッチメント』の取り組みを行っている。それらに関し、実習期間中に学んだことをまとめたいと思う。

表 実習の日程

9/3	9/4	9/5	9/6 午前	9/6 午後	9/7
キリン班	キリン班	モルモット班	病院班 (午前)	モルモット班 (午後)	モルモット班
9/8	9/9(休園日)	9/10	9/11	9/12	9/13
サル班	サル班	休み	ライオン班	ライオン班	ライオン班



写真 4: さまざまなハズバンドリートレーニング

左上から時計回りに 1. マンドリル採血トレーニング 2. エミュー採血トレーニング

3. フランソワルトン雌エコートレーニング 4. ライオン採血トレーニング

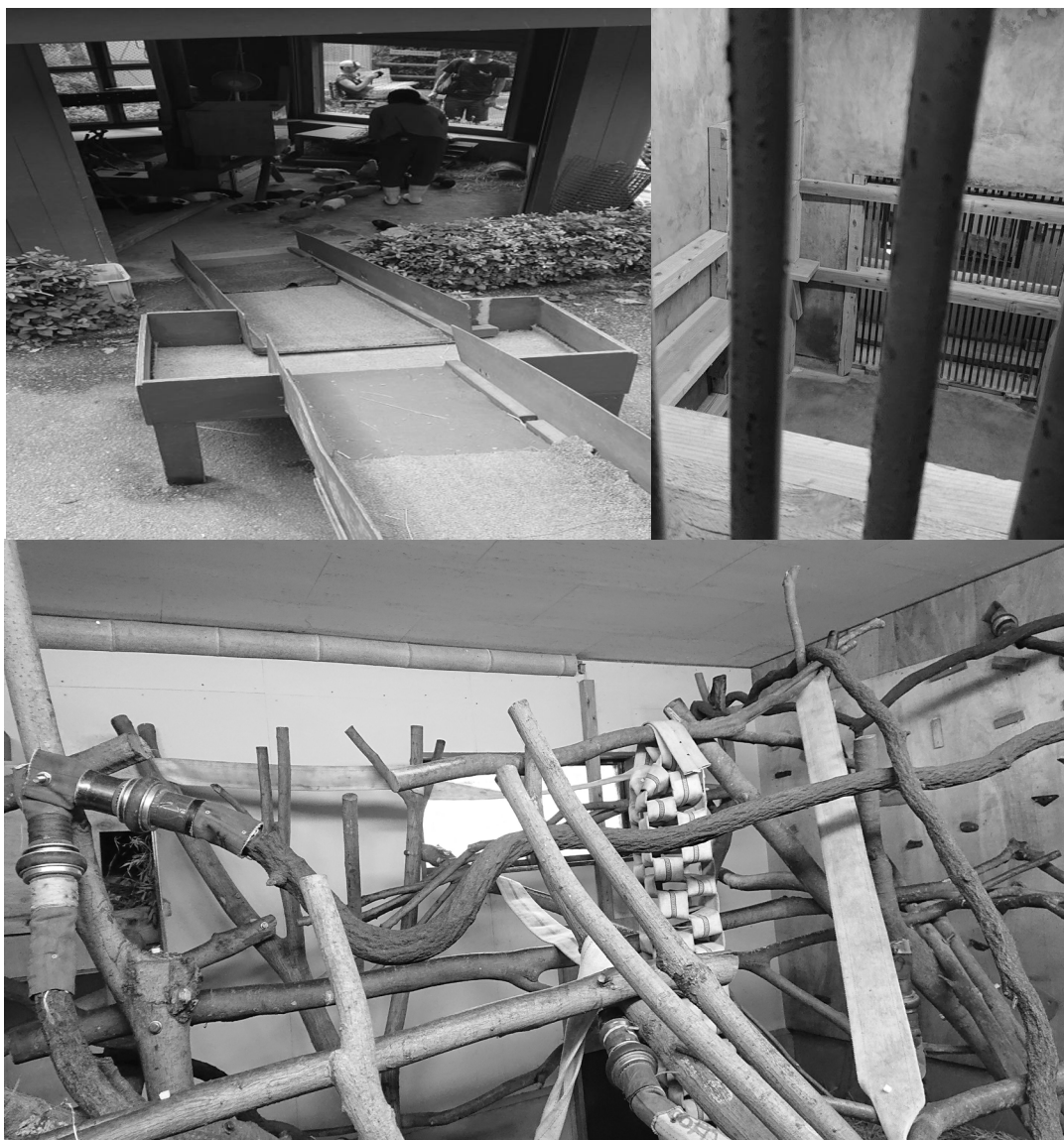


写真5: 環境エンリッチメントに配慮された仕組み  
 左上から 1. モルモットの通路 2. 獣舎の木枠 3. レッサーパンダ屋内展示場

ハズバンドリートレーニングとしてマンドリルやライオン、アザラシなど様々な動物でそれぞれが行っている採血のトレーニングに加え(写真4-1・4)、エミューの実際の採血も見ることができた(写真4-2)。トレーニングの際に飼育員さんから「動物がトレーニングに参加したくないときは無理にトレーニングをさせないことが大事。強制的にしてトレーニングを嫌いになってほしくない」、「トレーニングは楽しいものだ」と動物には思っていてほしい」と聞き、なにより動物の意思を尊重していることを感じた。

大牟田市動物園で行われているハズバンドリートレーニングは採血だけでなく、扉の開閉音を怖がるフランソワルトンの開閉トレーニングやサバンナモンキーがトレーニングを受けるために収容室へ入るための収容訓練、雌のフランソワルトンのエコートレーニングといった(写真4-3)、それぞれの動物に対するトレーニングを行っていた。これらのトレーニングは健康管理だけでなく繁殖計画にも繋がっていることが分かる。



環境エンリッチメントとして、モルモットのふれあい体験でモルモット舎からふれあい台の間に橋を設置し、台へ登るかどうかをモルモット自身が決めることができるようになっていた(写真5-1)。これはふれあい体験に参加したくない個体を無理に参加させてストレスが溜まってしまうことを防ぐために行われている。また、猛獣舎に木枠や丸太を入れたり(写真5-2)、レッサーパンダの屋内展示場に木や消防ホースなどを組み合わせたアスレチックやボルダリングを設置したり(写真5-3)、動物種ごとにフィーダーを工夫することで動物本来の行動が引き出されるようになっていた(写真6-1・2)。

特殊なフィーダーは、野生で生活している動物が一日のほとんどの時間を餌探しに使うように、園内でも時間をかけて餌を探して食べてほしいということから設置されたそうだ。猛獣舎の木枠や丸太は、ライオンやアムールヒョウが本来なら木に登ったり、高く跳べることを活かす方法を考え設置したという。

動物園での仕事のほとんどが動物の飼育であり、職員は担当している動物を全て巡回する必要がある。個々の動物にかけられる時間が限られている中で、微細な変化にすぐに気がつき、対応している飼育員の仕事を見て、動物のことを第一に考えているのがとても伝わってきた。



写真6: 動物種ごとに工夫された特殊なフィーダー  
上1. キリン用 下2. モルモット用